# 春色恵之花 上編

特
へ遠13
843
人

# 春色惠の花二輯の序

動かしがたきものは醫師病人と問
そこなうあたへん。紀氏の戈女が古事は彼
相國寺の美名殘して醫師梅とれ
曾操乃先途の梅は苦を酢とする軍勢の
早即塩梅の臣と執事が古名なり

門へ遠13
雑843
巻ナ

明治三六年
十月十八日
購求

梅暦を開版して文永堂が常に吉日
良辰とえらびしを是有官数賞人遊
行の袖にも推しらるるよりて見南枝の
御風雅はこれまでの香を傳へて万家に
もてはやさるゝ賦本屋衆の軒端の梅暦と
郷穂の賞言をまづ作者の幸福と成る



家初は裏家中より郷もり塚の傍四方
賓生の逝向今は辰巳の園ようつゝく
輝るゝ時に賓人よりて前後八編の梅暦
まさしく余蒔の種を下して六冊となせ睦の
花枝の雪中の寒紅梅色香も深き渓
爾が筆ふも賓〳〵髮の風眼前と流行

五分の菊ざる新菊の魁惠の花由可里
ふたよう法縁日の植木也るべで宝暦の根
賞玉ぶき袖を並べ此庭を召ぶ由へ求ら
ぶへと一向よ扶紙ふ願ふふ為ん
于時天保六未初冬末陽を待新板ふとて等を
狂訓亭の東隣ふ採ふる点慢先生東都人

情物の本を流行初し作者の元祖
南仙笑楚満人六年以来改名して中ま
発行の詮賞家為永春水の雪よ庵ど
此差中でハ初編より為ぶ迄浮き居已
の小庵稲荷横町の南窓ふ

櫻川由次郎謹誌

由二樓

巻末に出る補像を
切て動く様に拵る
唐琴屋の内藝者
よ孫八

撞家町
唐琴屋の蜆蛤
丹次郎

悪漢傳八

行路難ふ題も

憂旅の
山ぶしあるぐで
道ふまぬ
緑の林
ひるぞ
みくまれ

右
清元延津弓

小梅の里の女達も
時いくさ移り
辺鄙ふ流泊

くるまきさのとも
いく旅の藝者と
形りしきこまと越ると
ふふ藤兵衛と
奇縁の楽
忽然うり

旅唄女於由

春色恵の花二編上之巻

江戸　狂訓亭主人著

## 第七回

さてもお由ぶ難儀の中へ立入る其人ハ弱きをくじき強を折〳〵生質を得る東男手柔の業をとらふりのあるが宮茶より奥の召ゆく始終をイヤ俠侍ハが非乱紅子の嵩惑不便ハ思ひ表ときてさ〳〵ふるる金をのこ〳〵立り〳〵生産を溺し〳〵侍ハが悪計を除きとさせ

早く尚訓を出さんべく路用もりもく不自由させま
じくと強るるるく伝切ゐ世話をゐるべゐ中ハさう
ゐり親父ハ義を清をふるく為ごてをもりるく
信心する成田山の住利益ありとくするゐ成田の方を
拝礼し粗おりくと礼詣して今夜ハ御山ゐ通夜をゐ
いるく神徳を蒙らんと中るく降る雨をいとハぬ
様の病を立出るく不動号へと来詣をしるるさるべ
成就おりくをべ義を来ゐたのを申るく義を来ゐも雨天



よりあまり遍留せるくことるるべ一日二日ハこの家ゐ粗ぶ
ちるゐ来おりくを詣り宿るもそのゐりをいひきるせるくゐ
土産のあるべも元来ゐよき者ゐるくく作ハの要ごくく
をゐるくく思ひ居るることるるべ義を来ゐ男衆を抜び
実ハ旅病続も芸人の旅りせきるるべ半減ゆく作ハとの
相談るるべ半るるくくるべと一出るるるるくひ
別ごんゐ酒者をこるく義を来をるるくけるべ義を
来も病く祇義をつるくくおりくを相ゐゐ酒をべくく

くくるゞ既ふ生目もくまきく兩八次第ふ後つゞ
き物さくさいん方ゑ〳〵世ゑも志んくとゑりし由志
おゑくハれゞゑくそふふ三味せんをとりいゞゞ「ハ志く
さんふいきゑせ中のハふ新ゞゑくゑ内儀ゞひきゑ志ヨト志
のびゞまゑて

浄瑠璃「けふのゞげんの初昔悪性ときゑく式絢ゞ
いゞゑの月や私のゑゞげ「ゑゞゑゞやゑきくの
政別ゑゑ果報も一蓮とゑめくゑゞさの



分の福ゞひ「初ゑゑるゑゞちるゑ寿ふ「公
の底の志ゑゑ義ゑ〳〵「志ゑろゑゞゞハ「ゑゑいる
ト小声ゑゞゑくもうゑくくゑ順ふ節さく三味せんさくゑ
〳〵未熟の業ゑゞゞ義ゑ系ゑくゑ〳〵ゑ由を看ふ田舎
ある元のくゞせものゑゑゑのくくゑ〳〵の旅ゑせぎ蓋も丹田山
綿紬とゞゞめハ思ひゑゑどよくくゑゑ見ゞ自然と艶ある
本結城初けくくくゑ厚化粧ふあくゞ素肉のゑつく
〳〵さゞゑくくてあんゑ蓋人が田舎人ゑせぎふ生〳〵ゑゑと

いぶり〜なまばかりふ匂ひ　後トキニマア　おめ〜遊紙子ハ
どろ〜く田舎へ出るのでなく　おめ〜の着るり容儀とうひ
繰金の中ゆも沢山あハ絹着物もこぶく〜　あるら
まぐ〜出て来ると　居ゆうひとけでもあるてのるり久男の　目を切ふち地を
ちるまとゆ　じやアヨりいとうりのぐ出て来たのうく
中　イエ〜どよいうく〜そんなるでハどざいません　上
おとろさんが落金でおざいませうり　唄女でも〜〜と



おもひ付ます〜〜ちるまとゆ　着ハうんとうでゆ〜　衣形ハできま
せぬどふも繰金でハおもハ考ても世ゆるゞ主流どろ〜主中へ
まづうしろく出ません　ゆえマア　田舎へでもと中て
ちるの方へ出るくまのろくのぐどざいます　後　ちく〜ふ
さうるうとうのよりいるゆぐ形りうちやアどふろせどの
ゆうぐゞ減ふおめ〜ゞまく　ゆびを形
くるぐくる稼ハ　ゆ　せ何　田舎へ出るるゆゞるものうちト
まぐりうぐゞちいるゞ結土でおめ〜ふ近付ふるうく　元

義ふ
感じて
赤の糸
結ぶ

さぶいと思ひて立流みを着ゐしてアせうアゐんぐも
マア強金へうつさうかいをたづねうぞと通人
めくさうをいふやうぐ彰簡ゐも嗅女ゐもれ爲ゐ通
づきもあるーまこ友遠の産業をつとめさせても一日有
二金中三金ハゐんでも四へぜ強させるやうぐ桜川の由
でる新孝でもかいぐ知いきの嗅女ぐとしやアまきる川
向を通る人をとるやうゐやアもう四へぜ強土ッ子どこーぐ
去地をまゐまくとんゐ訪ぐ知やもくうるのも何のう

縁ぐろの是非おまぐ一番いまくやうろうろぎんと
さういつくゐゐ強金へうくうぐつトいまくうまと
しきおりーぐ知どゐーくとんゐ彰毋ーの人と代面ゐ泊
り金ーく弱義を退くこのくうぐ今より来ちのくよ
りゆもとさも伝切ゐる男童ゐわまぐくと来まぐ来を爲
しくおりぐ知ゐといく変うもひゐを世ぐ凡猫のこま
くくくゐ知のこゐ礼まくゐゐーー姫童の着まぐーとと
きど臭ゐぐゐ浪臭をつくくくの風情うの爲まゐもくま

ぞんじ知つて居るぞうよそ〳〵〳〵後「ぞんぶわきて
やうもぞサア様〳〵体をせく白んごろ、おいらもおまつて
やうぞサア〳〵様よく〳〵大きふ申ます〳〵無屋をさせて
のの由「アレさいろ〳〵この俵このとおのでいごさいません
ヨトまそ〳〵涙ぐむ後「ヨヤ此子ハ泣のう何ぞ言ふさうろ
さう由「イヤエどふいて〳〵てきうでいごさいませんが後「生ぜ
て何うをさぞのさのぐ〳〵申のく由「どふいて〳〵勿論
あの為〳〵さうふまでいあります、ヨあんまり、

さんが伝切ふもつ〳〵やうろ〳〵まて〳〵ろそく何ぞ出〳〵く
あつさのぞいごさいまして後「自ぜ人ふ伝切ふさまろと腹の
立やうろ申ます〳〵由「アレサさうでいごさいませんが是ぐ
一人もあそこのやうるい方ふ出合さうもやう〳〵どふぞと牧
ぞまして〳〵私のやうるさうふ者ハ出ふあのもぞ〳〵つき
ゆさるぞろふと思ひまして〳〵そまるまと若労ぞいごさいて
ト悲しの泉まそ〳〵後「涙をこる眼ハいとぞうやう〳〵文
後「涙ふ心の底ふ申まて欲目ぞ思ハそうまぞ

染色を今一際うつくしく殊なる好みの衣裳を
着せたらバ辰巳に名高き唄女でも柳江町の仇者とても
かなしとまふにハおよぶべからず自由にならバまづ此所にて
黒繻子にて梅の中に流るゝ春の一重帯
極上あつく織の白七子を唐納戸の紋付に
染め江戸褄模様にあしらひ梅紅白の上絵彩
又銀糸にて松葉をちらしに縫せ雅景なる
帯でも細密なる物の下に着れバ唐納戸に松

葉の銀糸も古風に見えず梅のみどりも紺
やさしく見えるハ画工英泉の筆意を移して下絵ハ
縮緬嵐のさや形ことハ大きくめづらしく染ぬの中形よし古風めかしく見えず
帯ハ花又揚羽に又糸をもつていからんで模様を
立涌のごとく縫せたらバ額がゆくつてよかろうに
か黒のおぼろふくに両話の花形をもちぬひ
きせたらバどのやうなる流行にて粋な
苦労も樂しみ思ひ出ぐさふしらべや

由「るふう考へ出して」ふさのぐいろいろ申す事

茂「十二サ

ふさぶハ赤色ゞ今とんざるをんぐ〳〵大きふ若芋

を〳〵ちつサハ〳〵ト笑へどかようハ何由ゑ

きぢのコトハ〳〵稲ばコゞうのことも奇ふうり

由「ヲヤ

ぢ、ちさげもさることゞございまー〳〵子へトもと

奥を赤〳〵もるもの正直なる公根をおもくだいぶゆ

〳〵ゆり

茂「ナニ〳〵そんなことゞハ

おもひなさんか実ハ不粉ゞ

ちめくの外の上を考や

角と思のふ〳〵ゞふぞ後ち吸つて〳〵一ぜん立派ゞ押

出して〳〵ぜんやと業らもて〳〵えて〳〵公根ゞ〳〵ふとゞん

ゞるゞを考へ出して〳〵このヨト表ちふのこのこゝおびゞまでのむゞぎん

ようのこけをハふ〳〵〳〵えるゞせばお

ようハ〳〵〳〵

「そもそもゞまでふ私〳〵を庄ゞのきふ思

うもて〳〵

めー〳〵ゞさのゞ〳〵

茂「ありゞゞ迷惑ゞ〳〵ゞ風と

ちろふおゞひゞと根ゞをぎあくまで世話をする奇特も

時ふゞりけりさの

「あつゞまゞ〳〵ゞ思ひるゞらませよゞ

とふゞこのをえゞ見をてゞるゞ〳〵ゞふとゞゞもあんまり

えぞうりであるその住外門ごろうふうとはどまはと
指絵はまぶぬ形ひざうり粗うるーくうりまはヨトふうく
その身を砕らつく内場ふ幸魚の云まハ〜義兵衛
まはくうるゆく義〳〵えうけハどふうきゑんを狼と男ハの
外ふおとゑ〜い正直者ご今のとりのゑうゑゆゆる
ことごがまご家内ふ義兵居もゆ〜ふねは義兵衛で
もゑ〜ふ宅てるはまうふそまも舞づまりごとおゆ〜
ううどどぐ小はきる寮をてまくて〳〵エうんとうぐ



ございまそくトんまふうまてくゆを舎せおゆ〜ハ
義兵衛のそぐ近よまバそのゆをとくく義八十二おゆ
おゆどのことでもゆくハナトにうゆ考らまてく砕うくく
〳〵アアレ○チョントホの跡てまてうり後ハ梅おとそのの
三ゆんふふ〜くあり

## 第八回

京町の猫通ハ久り揚屋町その表菓子の奥の方と
うふことそハ里ハとう里吉とうの男義者の住居とうく

て三口人ようく俄の稽古の舞●「ゑびすこいのふ奴ど
ぞめつてふうらうを着のら▲「中そく底つけうを
つき鈴次郎とんゞどろこの●「ヨイ〳〵ゑびすさてあれ
きて▲「よつく〳〵●「ゑびすぜんゞ栗源の曲舞×「るゞ
ふ砂糖も雪太白きるこもあんを一粒あり●「ゑのんを
つくろふ大門口■「ちんな社愛やる丈の床さて生揚
郎ぞふけく×「ふけとう打くまいあのふせ●「つい
とう者るこのあつく▲「ゑびすぜんゞ名代〳〵ア



くとひまてと拝をゐげ出そ●「サア〳〵のうちつこ弟
ふ者ちくやうそるぞ▲「マアまて〳〵体を稼〳〵みねきふる
つくやりてどるぞ●「のうい立るようようろふ×「くまて
ぐつ四人ゆるこるぞ▲「そりやアいつがうア堀まぢちよう
と性く出ア白うう稼●「そりやこそそろ〳〵逃
出を孫重を白くべやそこの客付金も見ぐうしひ
ものぐ▲「ナニ〳〵さうゞやアく今見●「のぶつが延津賀さん
前の月ざうひとこせくるのう▲「いんゆやさうでいきく少し

内用があるとう ×「へこ白いようなるべ性ぞとようろくのぜ

▲「ナゼ〳〵 ×「経用白ろべ経用もおそ白ぞ ●「白ゆ大うと

のと 春ろ 食ろもる尚ぶあるのぞ ▲「コウ〳〵そもこわど毒地きと

白で八経へぜ ×「酒ゆも女ゆもびり〳〵もる男ぞ ●「トいのが

お産賓の酒八らやぞろゆ ●「そりやア智てことよ ▲「そも

不白へ酒八寿る角も女八角ろうろつく来ろうどの

も詮方ろゆ ●「ふこづろいゆもやもるのゆ ▲「そもよう

こるんも白へおいろアふぞんきろ見ぞ伺の関係でこんな

女沢山な場所へ来ることつくぐとふきぞ時があるぜ

「その女沢山の中で父ぶ出来白へろもよりく見りの男ど

▲「そもよう他の英雄をくぐくぜ素人の中ゆ居てきへ女ど

うるもへのゆ女ぞろうの中へきのつきうろきへつてく ×「モウ

くるゆくくとらいまるぞろゆもてこ素直もろぶ ▲「ヘン おめへ

じやアあるめへトらいあぞろ陸子の外へ良を中一て臨次

を不てろしぞ ▲「ヨヤくとまりへおつりきる女ぶきものつとぜ

○コウおらろが知ろ極へ女八この廊中へ白へきぞ ●「そりや

そこころちよいと陸子の外面を出すと雲ふ女のるゆ
をいハアそんゆゆもりつきてくのら▲イヤちらーいて女ども
眼つきのつきんど×「そるの志ゆんとーさ■「口元のうゆら
ーい●「ゑり元のきまいる×「髪の毛のさらどろとやうた
●「三年の角をふりてて●「火鉢をふくいをろーさ■「サア
ーつまら稲ぐをーハいふーうけのことをーー稲ら▲「イヤ
おうどんどやアあいり藝者ごまづけんぞんわのてまを
いる女ハ稲ぜ大うと辰巳ろふ×「インニャいちらるもるまを

●「稲ごろうぜ×「うるわど猫の稲ハそるまをの●「ふゆん
と遠くハるまを■「まどろーいらげんふもまを▲「志ゆまを
どやアあ稲あんまりいて女でをゆもるの●「ケウもまてを
ーー唐琴屋の内唄女どろふまど年のいるまを義明ら
ーい部の女どぜ▲「きうヨーーまたとふちぶんの稲女ど
が隣の蛇ーゆーふまをろふ■「ヘンをネぐーふきいを
風るロをきのても世間の完ハさどるまを おいるハその女
の好男まで知ーて居るぜ▲「サアーーてまハ知ら稲でも

情人
會て
竊ふ
私語を
述ふる

いろ〳〵モウチットけいこをやらせたらよかべう。「きうヨ
く」▲「モウ日限ぐらくうるうるまげせいこうる稽」「き
がせいこ。そなたでうるうせる稽」日やア男ひやうまるぞ×「支」
ちうそなたこ〳〵もできあく」▲「ハもめんの糸とまるぐるぞ■「ちと
きぜる種をまく〳〵のうサアく〳〵車輪ぐ〳〵ト
つきうる繋もちのけいこのさうぐ賑やうるをまわひき
久隣の二階ちんとうく〳〵うさ〳〵もひ家内の人〳〵まぐ
せ〳〵ちうかの唐琴ひの糸八男のひぐわようかく〳〵り



部をおさく〳〵もこ〳〵うぶき「アいとのでまこう
せうるふざのまはハトのひうるぐう丹次郎の奥をうるぐう
「ヨヤちまちん酒をいあぐりう丹「そきろきろ〳〵つまうく
居るのかるぐるりのうちうとぐろうつまう久のをえ
てもうく一人ぐ物ほかニッ男のんぐナゼどんるぐ
「ナアニ部ぐあるのうサ丹「あんまり又うのじやア絵う
おい〳〵アモウくろうと男うと「そまぐろてうちきる撫み
く〳〵ぎろうとくッてうるうるるぐど義さんを大門まぐ

おくり出して来まつく来るのとろのろ　丹　山しろ川
巻のろ　栄　ナアニ津波さんハ此ぢやア近所ゆら宅ゆ
ろろの人ぶ出来てきッたりろちくハ来るさいませんハ
丹　さうろそまでもどふぞも
栄　そまでもどふぞも長ろさ
おものやうゆハ今りませんハ子おいらんハ今夜アあんまふ
おちあつくいるものざろきげんをうくして来ふ
とろろとろくいるものざろ影造所や何ろを大勢
つけくとさまつくとものを首尾よくおくり出して去

まつくものとまつと何ざの角ごのと平四しのろろぶん
あふきをのこまりくろろふ塩見くおんなさいよ丈へ
丹　そくで出て来る時鬼を東ハ内所ゆ居ろ　栄　アく
ゆまりくとそまでぶ私きやア義さんゆつのくやとろ
いろぶおまさんハいろ強く　丹　ナニおいろアおッろさんの
用で出てんざろまぶ悔くとおまくゆろ
いろのサそくてこん角ハ宅へけッろ　栄　アけろ
まりくぶ私きやアまぶ仲町ゆ居る法りふさろ

しつこ〳〵やうすをうかゝふ　丹　さうそんかう〳〵いと
ゝ　栄　ゝ　きう〳〵さるりぐとんすがをく居すど
ろのとゝおもつくまとふ遠へゆくうつさげ子さつく
をるとうまゝ〳〵ひ申へトらへバ丹次郎ハあつとり笑ひ
丹　ゝさうぐどゞ今始ハまとふぎつとり志さッけすふ
栄　ゝアゝ子へはとふはもゝ〳〵のるぐつけ申　丹　ゝいも
らァよりやおめへゞ聞ふ婦く居やうとハおもふ申へ
うゝゆうぐ釜をうけさ侍ぐおいさのをかさづけふ

いつ
ゝ　栄　ゝとおもつくちよいとそのつとく居ちッ仁
栄　ゝヤッイもよい申へッイハ私きゞいのことゞハまへ
丹　ゝまんのおらゝゞそいつさのも志ゝ稼へぐよゥく
森　ゝなとゞやァ申へう栄　ゝうそぎッうりおさる申へ
おまそんの裾をおさへふ不和知をしてう
丹　ゝそまでどうゝゝさ栄　ゝそまゝ〳〵あのゥ丹　ゝあのも
稼へのんどァおらゝゞそぎ稼へうおは長さんゞくる
とゝるいのおうそさんゞまくるいけ申へのとうく

不逸口上をいろさどやァ移くら 第十二 ゆげ口上をば
いろのの子様くそをでもそろろさものうまとそふ一
見ちぶひぶ子おまそんが生くおらでざとおものと
きぶふお幸どんが こをふきのよ
ひろろり寄ふ八子 丹十ナァニおいろァ生ぶふ移へ
いろく寄まろろろよろろさあまふろんふ男ひる
ろろろろさおめくハよんどろ寄ぶろのトさら
ろく居ィ

春色恵の花二編巻之上終